



「研修便り」は、高知市立学校教職員研修の成果・内容の共有、研究所から発信する情報の周知を目的として、発行していきます。

研修名 第2回不登校支援担当者研修会

平成29年8月8日（火）実施

対象：高知市立学校不登校支援担当者、高知市立学校参加希望教職員

概要

学校内において、不登校の予防・対応に組織的に取り組むためのリーダーとなる教員の資質向上を図る。

【講義・演習】「さまざまな場面で活用できる解決志向アプローチの手法」

講師：高知大学 金山 元春 准教授

解決志向アプローチとは？—問題・原因志向から解決・未来志向への発想の転換—

☆ 事例提供者の問題に注目し、その原因を探って問題を取り除いていこうとする従来の発想から、事例提供者のもっているリソース（資源・資質）を生かし、相談者が望む未来イメージに向けて、具体的な目標をつくり、新たに解決や未来をつくっていく発想へと転換したもの。

「解決志向カンファレンス」のもち方

<参加者>

- ・ 事例提供者（話題提供者）1名（事例の状況に応じて複数名）
- ・ ファシリテーター1名（必要に応じてコ・ファシリテーター、メタ・ファシリテーターも）
- ※ コ・ファシリテーター…もう一人のファシリテーターのこと。ファシリテーターが進行、コ・ファシリテーターが記録というように役割を分担してもよい。
- ※ メタ・ファシリテーター…カンファレンスを客観的に観察し、事例提供者やメンバーに助言などする。
- ・ メンバー数名（事例の状況に応じて）

<ルール>

- ・ 守秘義務
- ・ 非難しない、犯人捜しをしない、原因探しにこだわらない。
- ・ メモは取らずに、いっしょにホワイトボード・黒板を見る。

<進め方>

- 0 ホワイトボード・黒板を、右上の図のように「現状・解決像・アクション・リソース」の4分割にする。
開始時間と終了時間を明示する。（30分を目安に）
- 1 事例提供者が「現状」を簡潔に報告する。
- 2 ファシリテーターが「リソース」（すでにあるもの、できていること）、「解決像」（どうなればいいのか）を事例提供者とメンバーから引き出すように進行し、書き出す。
- 3 ファシリテーターの進行のもと、参加者全員がブレインストーミング（何でもあり）の要領で「アクション」（これからできること）を提案し、それをファシリテーターが書き出す。



現状	○年○月○日○:○~○:○ 解決像	アクション
リソース		

* ホワイトボード・黒板の使い方



* 解決志向カンファレンスの様子

※ 引き出し方の参考…役に立つ技法

- ① 「対処」の質問（⇒リソース）
- ② 「未来」の質問（⇒解決像）
- ③ 「例外」探し（⇒リソース）
- ④ 成功の責任追及（⇒リソース）
- ⑤ OKメッセージ（⇒リソースのフィードバック）
- ⑥ 「ものさし」の質問（⇒リソース、解決像）

☆ ファシリテーターのスタンス（姿勢）*慣れてくればメンバーも同様のスタンスで。

◆役に立つ前提◆

- ① 「問題」よりも「解決」（よりよき未来）に関心をもつ。
- ② 物事は常に変わり続けている、小さな変化から大きな変化が生まれる、と考える。
- ③ 「解決」（よりよき未来）のためのリソース（資源）は、内（その人・その子）・外（その人・その子の周囲）にあふれている、と考える。

◆中心哲学◆

- ① うまくいかないなら、何か違うことをしよう。
- ② 一度うまくいったことなら、もう一度それをしよう。
- ③ うまくいっているなら、それを続けよう。

【受講者の感想】

- ・ 解決志向カンファレンスを用いると、出し合い話で終わるような会議の場でも、建設的なものの見方・考え方ができると思った。不安より、まず挑戦してみて、試行錯誤していきたい。
- ・ 若い担任が増え、一人で悩み苦しんでいる人もいると思うので、解決志向カンファレンスを取り入れることで、より組織的に取り組んでいきたい。また、資料も校内で配付し、共有しようと思っている。
- ・ ファシリテーターのリソースの引き出し方についてヒントをいただいた。
- ・ 誰も悪い気持ちにならず、むしろ話してよかったと思えるコミュニケーション・ツールとして、よい方法を知ることができたと思う。



児童生徒理解講座

講師：高知大学 鈴木 恵太 講師 平成29年8月8日（火）実施

目的

児童生徒の理解とその対応について学び、教師としての資質・能力の向上を図る

発達障害の特性を理解し、それぞれの「困りごと」にどう対応すればよいか？

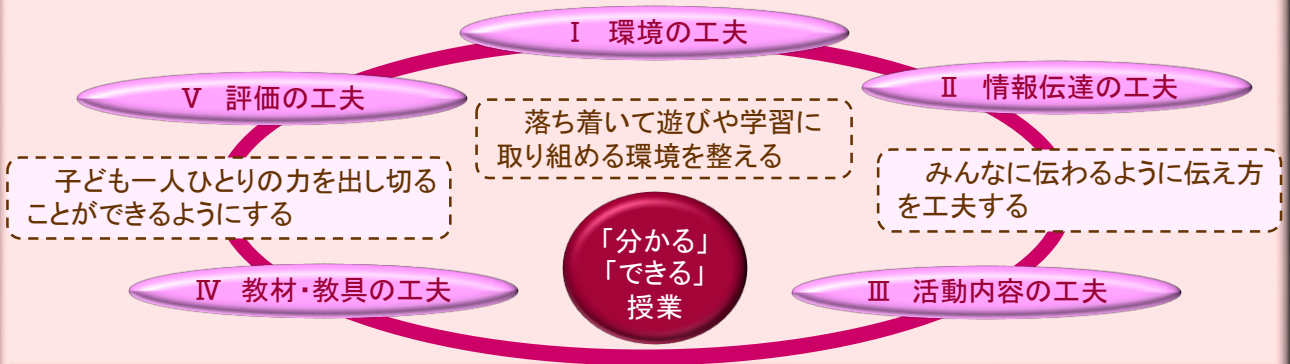
★ 「障害」は「理由」ではない

不適切行動や課題不達成は「障害特性」と「環境要因」との相互作用によって生じる。そのため、それぞれの「障害特性」を理解し、「環境要因」を取り除き、活動を焦点化することで、何をすべきかについて理解を促すことができる。

★ 認知機能とバランス 人によって「認知的特性」が異なる

- 視覚系情報処理 > 聴覚系情報処理 視覚的情報を基に考える力が優れている
- 視覚系情報処理 < 聴覚系情報処理 言語情報を手がかりに考える力が優れている
- 同時処理 > 継次処理 全体像（ゴール）が最初に見える状態から自分なりの方法で考えて作業することが得意である
- 同時処理 < 継次処理 全体像の提示を前提として、ステップ式にとらえ、一つずつ作業することが得意である
- どちらも得意ではない人もいる（情報処理の容量が小さい）

★ 指導の工夫 — ユニバーサルデザイン(UD)の授業づくりのポイント —



授業UD化 九つのポイント

- ① 学習経過の明示 教室の前面（黒板まわり）には一切掲示物を貼らない。
- ② 学習テーマの提示 授業の流れを黒板の左端に板書する。
- ③ 取り組んでいる活動を板書 板書の流れに関わって、今学習している位置にマグネットを置く。
- ④ 説明開始時の注意喚起 先生の方をしっかりと向くようにする。
- ⑤ 簡潔な説明と再注目の注意喚起 児童生徒がしんどい様子ならいったんリセットする。
- ⑥ 全体・個別に理解の確認 全体に対して「分かりましたか」と聞くのではなく、「〇〇さん、何が分かりましたか」と呼名して発言させる。
- ⑦ プロジェクタの活用 実物を見せる。
- ⑧ 視覚的評価 褒められることに慣れていないので「できたことが分かる」ような評価をする。例) できたことに、ハンコを押して、それをためていく等
- ⑨ 確認問題の実施 まとめと振り返りをする。何ができて何ができなかったのかを確認する。例) 授業でやったことと同レベルの問題で一問一答を行う

呼名することで、参加度が高くなり、当事者性が上がる

【受講者の感想】

「障害」は、子どもたちが失敗する「原因」ではないということが心に残った。すべて子どもに原因があると考えずに、教師側が「説明、課題、状況」の三つの環境を整える必要があることが分かった。また理解のスタイルは子どもによって違い、「目で見て考える」か「耳で聞いて考える」かどちらが得意かは人それぞれなので、今後は活動を分離したり、ペアやグループ活動を取り入れるなどの工夫をしたい。